

続 仏教と環境問題

角 田 泰 隆

仏教とは、普遍的妥当性をもった真理であり、その真理を明確なことにによって現実問題を解決する方法であり、その実践である。

一 はじめに

環境問題を知れば知るほど、「仏教」との大きな関わりを知る。いや、環境問題の惹起は「仏教」であり、そして環境問題の進展も「仏教」であり、そしてその解決がもし可能であるとすれば、その解決も「仏教」なのである。

このような表現は、奇異に思わせるものかも知れないので、ここで「仏教」という言葉の解釈について補足すれば、ここで用いている「仏教」とは、「真理」・「事実」、あるいは「真理の法則」「事実の法則」という言葉に置き換えられるものである。

すなわち、このような「仏教」は、信じる・信じない、必要である・必要ではない、関係ある・関係ない、といった個々の判断の問題ではなく、これらの判断を無意味なものとする次元の事実である。

「仏教とは真理である」とか、「仏教は真理の法則を説いたものである」などと言えば、読者は少なからず、仏教の傲慢さとして受け取られるかも知れないが、ここで私は「仏教こそ」とか「仏教は最高の……」というような主張をしているのではない。

むしろ、事実を事実のままにしっかりと見つめ、それが基本となつて、問題の解決法をさぐり、それを実践するということにおいては……、たとえば農業の赤峰勝人氏は

「宇宙に存在するすべてのものは、循環している」⁽¹⁾

という言葉や、その気付き、そして、その気付きに基づいた実践なども、私にはまさに「仏教」として受け取られるのである。

とはいえ、赤峰氏にとつてみれば、それは仏教ではなく、あくまでも宇宙の真実なのであつて、その赤峰氏が、

「私は、ただの百姓です。学者でも政治家でも宗教家でもありません」⁽²⁾

と言われていることをみても、一般的に「仏教」をも含む「宗教」は大いに誤解されている……、と『反発』ではなく、『反省』をさせられるのである。

ここで言う「仏教」とは、宇宙の眞実をも意味するのであり、このような言い方をすると何か崇高のことのような感じを受けるかもしれないが、実はそれは「あたりまえのこと」なのであり、「あたりまえのこと」が「仏教」であり、その「あたりまえのこと」に無知なのが、我々：いや私なのである。

現実の事実を説いた「仏教」は、まさに法(眞理)を説くのであるから、その眞理を、なにもことさら「仏教」と言うこともなく、現実の事実が……つまり、たとえば「環境問題」が……「仏教」である、などと言う必要もない。

ゆえに、ここで言う「仏教」は、一宗教一宗派でもなく、一哲学一思想でもなく、一法則でもなく、一信仰でもない。

かく言う私自身、「私は仏教徒である」とか「私は仏教を信仰している」という言い方も時にはするが、それは、そのような「仏教」を仮に、世間の常套として「信仰している」と言っているにすぎないのである。それは、一般的には、「仏教」は「宗教」であり、その宗教の一つである「仏教」を信奉するものが仏教徒であるから、その仏教徒の一人として扱われることに、私は別段反論することもないという程度のことである。

以上の如く、「仏教」は「法」(眞理)を説くものであり、現実の世界の法則を説くものであるから、現実が起こっているあらゆるものごとは、この環境問題も含めて、仏教の説く法則によって「ある」のである。ゆえに、環境問題にだけ、「仏教」をあてはめるべきものでもないことは言うまでもない。しかし、環境問題は今や現実社会の一大事であり、人類の存亡に関わる大問題であるから、いま特に問題にするのである。

繰り返すが、環境問題は現実が起こった事実である。現実の事実の法則を説いたのが「仏教」であるから、現実の事実としてあるところの環境問題は、「仏教」の法則にそのまま依っている。ゆえに「仏教」について、上記の如く学びとった私にとって、環境問題に接して、それを「仏教」として理解したのは必然的なことであって、その解決に向けて「仏教」を用いようとしていることは、当然のなりゆきであったのである。

ここに拙稿「仏教と環境問題」(『駒澤短期大学仏教論集』第三号、一九九七年十月)の続編として、私が述べるところの「仏教」と、そしてその「仏教」と環境問題との関係を論ずるものである。(ここに、私がとらえる仏教を、一般的に理解されている仏教と区別して「仏教」としたが、煩雑となるので次出より「」をとって用いる)

二 仏教

ここに、仏教について、私が定義するのは難しい。「仏教とはなにか」これは、仏教徒にとつての……そして仏教学者にとつても……まさに「一生参学の大事」(道元禅師の言葉)であろう。

しかし、「仏教と環境問題」と題して論ずる以上、「仏教とは何か」に触れないわけにはいかない。私は仏教学を専門とする者ではなく、禅学あるいは宗学(曹洞宗学)を専門とする者である。だからといって、これらも仏教であると私はとらえるので、「仏教の定義は専門外」などというわけにはいかない。よって、その定義付けをしなければならぬ。先に述べたように、仏教に当てはめて「眞理」「事実」「眞理の法則」「事実の法則」等の語を用いたが、それだけでは不十分であるかも知れない。

そこで、私の現段階での理解をもう少し肉付けして語るならば、

仏教とは、普遍的妥当性をもった真理であり、その真理を明確なことにによって現実問題を解決する方法であり、その実践である。

ということになる。すなわち、仏教の開祖釈尊は、

「縁起」という宇宙の真理を悟り、これに基づいた「四諦説」

という現実問題の解決法を用い、その中の「道諦」すなわち八

正道（中道）の実践によって、自らの人生問題の解決をはかり、

この方法論および実践を用いて、多くの人々の苦悩を救済した偉大な人物。

と言える。

もちろん、「縁起説」にしても、「四諦説」にしても、現在知られるような整った形での説を釈尊が説かれたのではなく、それは後世の学者によって整えられたものである。釈尊その人は、人々の（個々それぞれの）苦悩を聞き、それを如実に知り、すぐれた智慧によってその原因を見極め、その原因を取り除く方途を授けたのであろう。人々のおかれた状況、そしてそこから生まれる苦悩はそれぞれに違う。よって、釈尊の説法は、それぞれに異なっていたはずである。ただし、その方法論には、おそらく共通するもの（四諦説）があり、個々に与えられる実践法にも、共通する何か（八正道）があったと考えられる。だからこそ、後世の学者によってそれが定式化することが可能となったはずである。

そこで、以下、「縁起」および「四諦説」と「八正道」について簡潔にまとめ、さらに、これらの「真理」を環境問題に当てはめて考えてみたい。

三 仏教と環境問題

○「縁起」

縁起とは、便宜的に書き下せば「縁りて起こる」であり、因縁生起の略語であり、よく知られた仏典の言葉を挙げれば、

A 「これ生ずれば、かれ生ず。」「これ滅すれば、かれ滅す。」

B 「これ有れば、かれ有り。」「これ無ければ、かれ無し。」

という言葉が意味するところである。

Aは「因果関係」を述べたものであり、Bは「相互関係」を述べたものである。

まず、Aの因果関係について言えば、現実の結果（果）には必ず原因（因）があり、それに縁（条件）が加わって結果（果）が生ずる。

たとえば、これを「酸性雨」の問題に当てはめれば、大気中の汚染物質が雨水に溶けて硫酸や硝酸になって降ってくる、それが酸性雨である。

一九六〇年以降、北欧やカナダの川や湖で魚がいなくなるという現象が起きた。これが結果（果）である。このような現象が現実の問題としておきたのである。その原因（因）を調べると川や湖の水が強い酸性であり、そのために魚が死滅したことが明らかになった。この原因も、実は結果（果）なのであって、その原因（因）は酸性雨にあったのである。pH5以下の雨を酸性雨という。一九六〇年以降、pH4以下の強い酸性のものが珍しくないとされる。ちなみに、ワインは大体4、酢酸は3、胃酸が2程度である。

この酸性雨もまた結果であった。すなわち、酸性雨の主な原因は、

自動車、工場、火力発電所から出る硫酸酸化物(SO₂)や窒素酸化物(NO_x)などの大気汚染物質であり、これに雨や雪という条件(縁)が加わって、酸性の雨や雪が降るのである。つまり、硫酸酸化物(SO₂)は水(H₂O)に融けて硫酸(H₂SO₄)となり、窒素酸化物(NO_x)は水(H₂O)に融けて硝酸(HNO₃)となって地上に降るのである。つまり、大気汚染物質(因)が雨や雪(縁)によって大気中で化学反応を起こして硫酸や硝酸に変化し、地上に降ってくる(果)のである。

酸性雨はまた、針葉樹等の樹木や建物や彫刻等にも大きな被害を与える。樹木について言えば、酸性雨が降る(因)と、土の中のカルシウムやマグネシウムと化学反応を起こして(縁)、貴重な栄養分を流してしまふ(果→因)。その結果、植物は病害虫の被害にあいやすくなり、やがて枯れてゆく(果)。

ここで、「因」「縁」「果」を固定化することはできない。因は果であり、果が因となって、それに縁が加わって果を生じる。縁についても、これを果とも言えるし、また因にもなる。とにかく「これ生ずれば、かれ生ず」で、現実はそのようにあるのである。

それでは、酸性雨の問題の解決は、どうなされればいいのかと言えば、「これ減すれば、かれ減す」で、硫酸酸化物や窒素酸化物などの大気汚染物質を出さなければよいということになる。そのためには、自動車の使用を減らし(都会のNO_xの半分が自動車の排気ガス)、電気の無駄使いをやめる(火力発電所の発電量を減らす)ことが大切となってくる。あたりまえのことである。

この「あたりまえのこと」は一応理解できる。この理解できる「あたりまえのこと」が仏教である。ゆえに仏教は難しくくない。

しかし、しかしである。この「あたりまえのこと」がわかって、これを実践することは難しい。ここまでの「あたりまえのこと」も仏教であるのだが、仏教はそれだけではない。この「あたりまえのこと」を実践するという難しいことも、また仏教なのである。よく「少欲知足」といわれるが、「少欲知足」の「教え」も仏教であり、その「実践」も仏教である。

ここにおいて、先に述べた、環境問題の惹起は「仏教」であり、そして環境問題の進展も「仏教」であり、そしてその解決がもし可能であるとすれば、その解決も「仏教」なのである。

という意味が明らかになろう。「環境問題」は、まさに「縁起」であり、「縁起」は「仏教」である。

○「四諦説」

スリランカのサルボダヤ運動の指導者A・T・アリヤラトネは農村開発に仏教の考え方を適用し、農村開発の四諦(「苦集滅道の四つの諦り」によって問題解決をはかる仏教の教え)というものを考えた⁽³⁾。

「四諦説」はまさに、仏教の「問題解決方法」であると筆者も考える。

四諦説の原意はさておき、その問題解決方法論的視点からみれば、「苦諦」は、現実の苦なる結果(果)であり、「集諦」は、現実の苦なる原因(因)であり、「道諦」は、その苦なる原因(因)の消滅方法であり、「滅諦」は、その結果(果)としての楽である。

これは、よく病気に譬えられるが、現実の病気(病状)は「苦諦」

であり、名医はその病状をよく観察することによって、その病気の原因（病因）を見つけた（「集諦」）。病因がわかったところで、その治療法（「道諦」）が導き出され、その治療法を実践することによって、健康態（「滅諦」）を取り戻すことができる。

このような問題解決方法は、あらゆる問題の解決方法として応用できる。環境問題の解決はもとより、人間の心的、内面的苦悩の解決も。

ところで、鶴田栄作氏は、環境問題を解決する道を、「四諦説」の中に次のように見出している。

さまざまな環境破壊の実態を直視することは「苦諦」ととらえることができるだろう。環境問題という地球社会の苦悩の原因を反省し探求し、それをはつきりと悟ることは、「集諦」そのものではないか。持続可能な社会のビジョンとしてのエコトピアは、一切の苦悩を生滅した安穩の境地、つまり「滅諦」と言えよう。そして、生態学的倫理に基づいたシンプルなライフスタイルの選択、利益至上主義という貪欲に根ざした経済システムから真に持続可能な経済システムへの移行など、環境問題を解決するためのさまざまな提案の実践は、苦悩を減するための修行、つまり「道諦」と言えよう。

（鶴田栄作「宗教とエコロジーの統合」、『ディーブ・エコロジー考―持続可能な未来に向けて―』解説、平成七年六月、佼成出版社、二二七頁）

さらに鶴田氏は、八正道についても「地球の八正道」なる地球環境問題の解決方法を提案している。

また、「縁起」や「四諦八正道」等の仏教の教義と環境問題を関連

続 仏教と環境問題（角田）

づけて論じたものに田中良昭「仏教・禅の思想と環境問題」（『環境問題と宗門』、平成九年四月、曹洞宗宗務庁）がある。

仏教は「縁起の法」といわれる。この「縁起の法」とは、この世のすべてのものが、一つとして独立したものではなく（無我）、また、固定したものでもない（無常）。すべてのものは、他との関わりによってお互いに生かし生かされて成り立っている、という道理をいう。しかし私たち人間は、この道理を正しく認識する智慧を持たないために、自己中心的な自我にとらわれ、空しい人生を送ってしまふ。釈尊は、この空しい人生のありようを苦と捉え、苦の原因は、自我に対する執着にあるからして、その執着を離れる八つの実践（八正道）によって智慧を確立し、その智慧によって「縁起の法」に目覚めることができる、と説かれた。これを四諦八正道という。八正道はまた中道ともいわれる。中道とは、極端を離れ、一方に偏ることのない調和のとれた節度ある生き方というのであって、自然との調和、共生を基本とする環境問題に対しても、その実践原理としての役割を十分に果たしうるものである。

釈尊によって説かれた「縁起の法」と四諦八正道の教えは、後に大乘仏教が起るに及んで新たな展開をみることになる。すなわち「縁起の法」は、「空」という言葉で置き換えられ、あらゆるものは固定的な実体としては存在しないという理論的な意味と共に、あらゆるものに執着してはならないという実践的な意味が強調されることになった。また、四諦八正道の教えは、六波羅蜜という新たな菩薩の実践道に取って代わられた。この六波羅蜜では、新たに布施を強調し、従来の自利を中心とした

修行道から、自利利他一体の実践道へと拡大した。この自利利他一体の実践道を利行という。すなわちそれは、道元禪師が「利行は一法なり、あまねく自他を利するなり。」(利行とはただ一つの真実の法であり、あまねく自分も他人も利益するのである。)(『正法眼蔵』「菩提薩埵四摂法」と説かれるように、他を利益することが、そのまま自らを利益することになるという道理を説いたものである。

また、晴山俊英氏も、仏教(「釈尊の教え」と環境保護の接点を次のように言う。(『グリーン・プラン行動のためのQ&A』へ一九九八年二月、曹洞宗宗務庁刊)に収録されているQ&Aの一つであり、「釈尊の教えから私たちは環境保護のためにどのようなことを学びとることができるのでしょうか?」という問いを設定しての答え。)

釈尊の教えと一口にいつても、その意味は多岐に渡ると思いますが、ここでは例として四諦八正道について述べてみることにします。

四諦は平たくいえば「四つの真実」のことで、八正道は苦しみを解消するための具体的な八つの実践項目のことです。以下に簡単に語意を述べれば、

〔四諦〕

苦諦……迷いの生存は苦しみであるという真実。

集諦……欲望が苦しみを引き起しているという真実。

滅諦……欲望のなくなった状態が、苦しみのない理想の境地であるという真実。

道諦……苦しみをなくすためには八つの正しい修行方法(八

正道)によらなければならないという真実。

〔八正道〕

正見 ……正しい見解、正しい信仰

正思惟 ……正しい考え方、正しい決意・意志

正語 ……正しい言葉

正業 ……正しい行為

正命 ……正しい生活法

正精進 ……正しい努力、勇気

正念 ……正しい意識、正しい注意

正定 ……正しい精神統一

ということになります。これを、環境問題に引き合わせて考えれば、まず今まで誇るべき人類の文明の恩恵と想っていたものが、実は自分自身を苦しめている、という真実として捉えられます(苦諦)。その苦しみは、やはり人間の欲望が原因であることはいうまでもありません(集諦)。従って、そういった欲望を制御できれば、必ずや理想郷が実現すると思われ(滅諦)。そのためには、自分勝手な極端に陥らない正しい実践が必要になります(道諦)。

さて、その正しい実践は何か、といえば、まさしく八正道がそのままあてはまるわけです。問題は何が正しいかと判断する智慧を持つことで、そこに釈尊の教えとして中道(極端に近寄らない)ということがあります。

環境保護が大事だとはいえ、人間は何らかの環境破壊行為をせずには生きていけない存在になっています。ものを生産したり、家を建てたり飲食したり、果ては酸素を消費したりせずには生きていけないのです。つまり人間が生きるという欲望を発

した時点で、環境破壊は始まっているわけで、そこからすると人類などいい方がいと考えるのが一つの極端となります。

しかしもう一方で、実生活において安易な便利さを追求していいか考えてみて下さい。必要以上の贅沢を望めば、それも一つの極端となるわけです。今までの人類は、地球規模でこちらの極端を推進してきたと言って良いでしょう。そしてその結果、環境問題が深刻になったわけです。

正しさを見極めるためには、環境問題の現状を「知っている」ことが大切です。その視野を持った上で、自分が為すべきこと、自分の生き方を一人ひとりが真剣に考え実践すること、恐らくそれが正しい実践ということになるものだと思います。

これらの論述にあるように、仏教の基本的教義は、環境問題と大いに関わるのである。「縁起説」や「四諦八正道説」に、あらゆる環境問題を当てはめて、問題の解決がはからなければならない。いや、そのようなことを言うまでもなく、すでに現に環境保全団体によってすすめられている実践は、例外なく、この問題解決方法を用いているのである。それは、仏教の問題解決方法を取り入れているのではない。それが科学的に正しい問題解決方法であるからである。繰り返すが、

仏教とは、普遍的妥当性をもった真理であり、その真理を明確なことによって現実問題を解決する方法であり、その実践である。

四 曹洞宗と環境問題

「なぜ、仏教教団である曹洞宗が、環境問題に積極的に取り組ま

続 仏教と環境問題 (角田)

なければならぬのか？」

そのような声を聞くことがある。そのような人が、仏教とは何か、仏教教団とは何をすべき集団であると考えるのか、よくわからないが、私にとって仏教とは、普遍的妥当性をもった真理であり、その真理を明確なことによって現実問題を解決する方法であり、その実践であるから、現実問題を解決するために、智慧をもってその方法を明らかにして、実践すべきことを実践する、これこそが仏教教団である曹洞宗がまずなすべきことであると確信する。

環境問題は……「地球上の生命体にとって」とか「人類にとって」と言いたいところであるが、まずは……現実には「この私自身」に降りかかっている重大な問題である。その解決方法の洞察とその実践、私はこれを仏教と考えているのである。なぜなら、仏教は、元来、人生の苦なる現実問題の解決法として釈尊によって説かれたのであるから。

ところで、「仏教教団には、曹洞宗には、具体的に環境問題に取り組む前に、すべきことがある」という彼らは、それでは一体何に積極的に取り組んでいるのか、と聞けば、それは「心」の問題であるという。環境問題はすべて、人間の「心」の問題から起こった問題であるから、我々のなすべきことは、その「心」の問題の解決であるという。確かに、それはそうなのである。しかし、心の問題とは一体何であろう。「心」の問題と環境問題と、はたして区別することができるのかどうか。「心」の問題が解決すれば、何もかも解決するのであろうか。

最近、環境ホルモンが問題となっている。環境ホルモンとは、ホルモン攪乱化学物質 (Estrogen Disturbance Chemical) のこと

で、通称「環境ホルモン」(EDC)と呼んでいる。環境ホルモンなどというとか何か良きもののようなものであるが、これは実に恐ろしい。我々の身の回りには数十万種類以上の、もともと自然界には存在しない化学物質(つまり人間が化学的に生み出した物質)があり、空気や水や土が地球規模で汚染されている。これらの化学物質が、動物の体内でホルモンと似た働きをして、正常ホルモンの働きを乱し、免疫力を低下させ、ガンを発病させ、生殖機能や生殖行動などに異常をもたらす危険性があることが最近になって明らかにされた。

化学物質を多用する先進国では、若い男性の精巣ガン、精子数の減少、奇形化など、また若い女性では子宮内膜症や月経困難症などが増加しているといわれ、これらが不妊や少子化と関連があるときれている。そして、ここで注目すべきは、この環境ホルモンは、身体だけでなく精神や行動にも有害な影響を与える危険性が指摘されていることである。

たとえば、新築の家やマンションに住み移り、その後、頭痛をはじめとする身体の異常をつたえる人がいると言われ、建材等に使われている化学物質が原因であったという報告を聞いたことがある。あるいは、移住を機に、精神が不安定となり、怒りっぽくなり、夫婦喧嘩が増えたなどという原因も環境ホルモンの影響であるという信じられないような話も聞く。

環境が精神(心)に影響を与える可能性があることについては、このようであり、これに限らず、人間をとりまく環境と人間の精神作用(心)が密接に結びついていることは否定できまい。

確かに、心の問題は大切であり、環境問題の改善に、意識改革や価値観の転換が必要であることはもちろんである。しかし、それに

しても、今の現実には、環境そのものの改善がやはり重要なのである。

二十一世紀を目前にして、我々人類は今、重要な岐路に立っている。いや、人類が、人類の歴史にとって最も重要な転換点を、これから迎えるようとしている。

年々、紫外線が強くなっている。オゾン層の破壊が原因だといわれる。紫外線を長時間浴びると皮膚ガンや悪性黒色腫になる危険性があるという。また、大人になって白内障になったり失明する恐れもあるという。いちばん影響を受けるのは未来を背負う子どもたちである。

年々、ガンで亡くなる人が増えている。私たちの生活を取り巻く化学物質が原因だといわれる。食品添加物、農薬、ダイオキシン等種々の化学物質が私たちの体をむしばんでいる。特に子どもたちは深刻な影響を受ける。子どもたちにアレルギーやアトピーが増えているのも気になる。これらの化学物質による汚染は、まだ生まれていない未来の子どもたちにも害を及ぼすのである。

とにかく、地球環境の実態は、一般に考えられているより遙かに深刻である。人類の未来は本当にどうなるのであろうか。

皆なが「誰かがやるだろう」と傍観しているかぎり、何も変らなない。地球環境を蘇らせるためには、私たち一人一人が変らなければならぬ。

このような、人類の歴史の重要な転換点にあつて、仏教教団は、曹洞宗は傍観者ではいられないのである。

いま、曹洞宗は、我々のおかれてある現実を見つめて、すみやかに何をすべきかを考えて、行動しようとしている。その活動はまだ

試行錯誤の段階なのかも知れない。しかし、全国に、多くの寺院と多くの檀信徒をもつ曹洞宗は必ずや大きな力になれるはずである。曹洞宗はそのような道を選んで「グリーン・プラン」の実践に取り組み始めている。

五 両祖の教と環境問題

道元禪師は、たいへん山や自然を愛された。

われ、山を愛するとき、山、主を愛す。

〈私が山を大切にすれば、山も私を大切にしてくれる〉

（『永平広録』巻十）

と示され、自然とともに生活された。また、

峰の色溪の響きもみなながら我が釈迦牟尼の声と姿と

〈山々の色合いも、谷川の響きも、皆お釈迦さまの声であり姿である〉

（『傘松道詠歌』）

と詠われ、さらに、

而今の山水は古仏の道現成なり。

〈今ここにある大自然は、仏の修行している姿であり、仏の説

法している声である〉（『正法眼蔵』「山水経」）

とも示され、大自然のありとあらゆるものが仏のお姿であるとおっしゃっている。

また、瑩山禪師も、環境を大切にされた。

山に入り、山を看、この山を眺望すれば、小処たりと雖も、頗る勝地たり。

〈山に入り、山を見、この山を眺望してみると、限られた場所ではあるが、大変すばらしい場所である〉

続 仏教と環境問題（角田）

（『洞谷記』「洞谷山永光寺草創記」）

と、洞谷山に永光寺を草創された。また、道元禪師と同じく、

大地有情の外に釈迦牟尼仏を見ること勿れ。設い、山河大地、森羅万象、森森たりと雖も、悉くこれ瞿曇の眼睛裏を免れず。

〈大自然や生きとし生けるもののほかに、釈迦牟尼仏を見てはいけない。たとえ山河大地、森羅万象が様々な姿を現しているても、すべて釈尊の真のお姿そのものにほかならない。〉

（『伝光録』「首章」）

と、大自然は「仏そのもの」であると説かれた。

また、瑩山禪師は、法要儀式に松や華を立てる場合のほかは、樹木等の一枝をも折ってはならない（『洞谷記』「正中二年五月朔日」）と厳しく戒められて、不必要な伐採を堅く禁じられた。必要最小限を護り、豊かな緑と共生されたのである。

このような、両祖の言葉や生き方から学び取れるのは、大自然のあり方を、仏の姿と受けとめて、敬い大切にし、そこから多くを学び、まさに大自然と共に生きるということであろう。

もし、道元禪師や瑩山禪師が現代におられたなら、何を願い、何を語られ、何を行われたであろうかと思いをめぐらすとき、私は而今、環境問題の傍観者ではいられないのである。

（一九九八年六月二六日）

註

（1）赤峰勝人「ニンジンから宇宙へ」（一九九三年十月、なすな出版部、八頁）。また、農業者である赤峰氏は、一例として、その循環のあり方を次のように言う。

命を育んでくれる生きた土とは、具体的にはどんな土のこと

なのでしよう。死んでしまった石の粉ではなく、土が土として生きていくというのは、一体どういう状態のことをいうのでしょうか。まず、生きた土の中には昆虫やカビ、微生物が無数に生活していなければなりません。彼らがいなくて、草の死骸が土に化けることができないからです。逆に彼らが健康な生活を営んでいくためには、私たち人間同様、食べ物をおかすことができません。つまり、太陽エネルギーを体内にいっぱい蓄えた草や木の死骸が必要なのです。彼らは草木の死骸を食べて生活し、彼らが食べたカスや糞、彼らの死骸が土を豊かにしてくれています。そのことがまた、草や木に豊かな命を与えてくれることとなります。このあたりの自然の無駄のなさには、天の計らいを感じます。一匹として無駄な虫はいないし、無駄なカビも存在しません。一種たりとも無駄な草はないのです。その死骸や糞でさえ、一つとして無駄なものはありません。すべての存在には意味があり、その死すら次の命を生かすために完全に役立てられています。まさに、命が次々とリレーされているのです。(中略)たくさん昆虫と微生物、たくさんさんの有機物、それらが満たされて初めて、生きた土と言えるのです。そして、そんな土なら農薬も化学肥料も一滴も撒かなくても、命をいっぱい含んだ素晴らしいお米や野菜ができるのです。(三〇―三二頁)

(2) 同右書 六頁。

(3) 霧田栄作「宗教とエコロジーの統合」(『ディープ・エコロジー―持続可能な未来に向けて―』解説 平成七年六月、佼成出版社、二二六―二二七頁)

(4) 正見

正思

正語

正業

正命

正精進

正念

正定

人間中心のものの見方を捨てて、あらゆる生命を公平に扱うディープ・エコロジーの見方に従う。ものの考え方を人間本位にかたよらせることなく、地球的視野に立って正しく考える。

環境を大切にしないのに、大切にしているといった「妄語(うそ)」や「両舌(二枚舌)」「綺語(口から出まかせのいいかげんな言葉)」を使った「悪口(わるくち)」を言わない、正しいものの言い方をする。

意味なく動植物の命を断つ(殺生)ことなく、自然から盗むこと(偷盗)のない清らかな日常の行動をとる。

他の生物の迷惑になるような仕事、地球のためにならないような職業によって生活の糧を得るのではなく、地球のためになる職業によって、正当な収入で暮らしを立てる。

地球を害するような諸々の悪をなさず、常に正しい行ないをして、怠ったり、脇道へそれたりしない。

常に地球を心に持ち、地球の方向に心向け続ける。常にエコロジーの法則を念頭に置いて、周囲の変化にぐらつかないようにする。

(霧田前掲書、二二九―二三〇頁)